

## 図書室だより

第4号

## 過去を未来へつなげる回路を！

作家で詩人の池澤夏樹さんが個人で編纂した日本文学全集（全30巻）を上原教育振興財団から寄贈していただいた。古典文学から現代まで網羅する新しい日本文学全集である。古典の名作を第一線で活躍する作家が新訳をしている。あの直木賞作家の角田光代さんが『源氏物語』（紫式部）を訳し、川上未映子訳の『たけくらべ』（樋口一葉）などなど、新たな文学として、古典がよみがえっている。ぜひ、今を生きるみなさんに、手にとってほしい。少し、分厚い本ですが、手にとって、じっくりと向き合うことで自分の世界が変わるはず。

この本を編纂した池澤夏樹さんの言葉『日本文学全集 宣言』（一部抜粋）

はるかな昔、大陸の東・大洋の西に連なる島々に周囲各地から人が渡ってきた。彼らは混じり合い、やがて日本語という一つの言葉を用いて生活を営むようになった。

この言葉で神々に祈り、互いに考えを述べ、思いを語り、感情を伝えた。詩が生まれ、物語が紡がれ、文字を得て紙に書かれて残るようになった。その<sup>たいせき</sup>堆積が日本文学である。

特徴の第一は、まず歴史が長いこと。千三百年に<sup>わた</sup>亘って一つの言語によって途切れることなく書き継がれた文学は他に少ない。

第二は、恋を主題とするものが多いこと。われわれは文章によって人間いかに生くべきかを説く一方で、何よりもまず恋を語ろうとした。

第三は、異文化を受け入れて我がものとしてきたこと。ある時期までは中国文明の、ある時期から後は西欧の文明によって文学を更新した。

今の日本は、まちがいなく変革期である。島国であることは、国民国家形成に有利に働いたが、世界ぜんたいで国民国家というシステムは衰退している。その時期に日本人とは何者であるかを問うのは、意義のあることだろう。その手がかりが文学。なぜならば、われわれは哲学よりも科学よりも神学よりも、文学に長けた民であったから。しかし、これはお勉強ではない。権威ある文学の殿堂に参拝するのではなく、友人として恋人として隣人としての過去の人たちに会いに行く。書かれた時の同時代の読者と同じ位置で読むために古典は現代の文章に訳す。当代の詩人・作家の手によって、われわれの普段の言葉づかいに移したものを用意する。その一方で明治以降の文学の激浪に身を投じる。厳選した作品に共感し、反発し、興奮する。

私は、誰か？日本文学は、それを知る素材である。過去を未来へつなげる回路を用意したいと思う。

「友人として恋人として隣人としての過去の人たちに会いに行く。」日本文学に出逢うことで、過去を現代に未来につなげることができる本。それが、この日本文学全集である。良い作品を読んでいると、まるで自分のことを書いているのかと感ずるときがある。それは、人間の根底にある変わらぬ思いなのかも知れない。数千年のときを越えて、残った文学を新たな訳で読み直す。

どうぞ、図書室に来室して、本を手にとってみよう！！

日本文学全集は、図書室に入って右側の本棚に並べてあるので、ぜひ！！



さあ、**答**えを求めて**文**学に**何**かおう！！

